令和３年度　鳥取県立農業大学校評価システムシート（第2回）

ミッション	次代の農業を担い、指導的役割を果たす人材の育成・確保
重点目標	○学生・研修生の円滑な就農の支援 （個別指導の強化及び関係機関との連携による自営就農及び雇用就農の支援強化） ○ GLOBAL G.A.P.の実践と白ネギの認証継続と花壇苗の新規認証取得

評価基準（達成度）

A　１００%以上達成
B　８０～９９%達成
C　６０～７９%達成
D　４０～５９%達成
E　３９%以下の達成

課題番号	課題	評価項目	現状	評価指標	具体的方策	経過・達成実績	達成度	次年度の課題と改善策	外部評価委員からの提案・提言
1	学生・研修生の確保	1　農業大学校の魅力発信	1　養成課程入学生数は平成２３年度以降、定員割れが続いていたが、令和3年度には定員30名を確保した。 ・入学者の出願のきっかけに「ＨＰを見て」の声が多いため、その充実が必要である。 ＜入学者数の推移＞ H28:21名、H29:22名、H30:24名、H31:24名、R2:22名、R3:30名	1 ・入学者数　定員３０名確保	1 ・オープンキャンパス(２回)の開催、学校ホームページの更新による魅力発信 ・高等学校進路指導研究会への参加および県内高校訪問（全校） ・各高校で実施される進路ガイダンスへの参加 ・高校生の職業観の醸成と農業分野への進路選択の機会提供 ・学校訪問の受入れ（随時）	1 ・オープンキャンパスを7月に開催し１８名が参加(うち県内出身者１８名、3年生１３名)。2回目は新型コロナの影響で中止した。 ・学校HPにおいて専攻実習の活動や学生の日常生活等について、その都度積極的に紹介するなど更新を随時行い、情報の公開に努めた。 ・県内のほとんど高校を訪問し、農業大学校の説明を行った。入学志願者の情報収集を行うとともに、学校PRを行った。 ・例年であれば県内農業系高校の上級学校訪問を受け入れ、学校説明を積極的に行うところであるが、学生寮を運営する管理者として、新型コロナ感染防止の観点から感染状況を確認しながら、受け入れについて判断した。 ・３高校の進路ガイダンス（今後の予定も含む）に参加し、学校説明を行った。 ＜令和４年度入学予定者１８名（R4.1月現在）＞	C	来年度に向けてオープンキャンパス等の各種行事を予定通り開催できるように、感染症予防対策を含めて、事前に準備を進めていく。 資料 1	
		2　農業高校との連携による学生確保	2 ・農業高校3校（智頭農林、鳥取湖陵、倉吉農業）の農業クラブをオープンキャンパス時に受入れ、3校出身の本学生との交流会を行っている。 ＜年次別参加者＞ H28:１２名、H29:１０名、H30:１２名、R1:6名、R2:12名 ・スーパー農林水産業士を志向する生徒の食の６次産業化プロデューサー育成講座への受入を行っている。 ＜年次別受講者数＞ H29:５２名、H30:３９名、R1：46名	1 ・農大生と農業クラブ生徒との交流会の開催 ・高大連携の実施 ・高校訪問の実施 ・食プロ育成講座の実施	2 ・オープンキャンパスと農業高校の農業クラブの同時開催による先輩学生との交流 ・倉農との農大一貫プロジェクトの実施 ・スーパー農林水産業士に係る食プロ育成講座受講受入れ ・県内農業系高校訪問による農業大学校の紹介	2 ・7月に開催された農業クラブ連盟の「農業後継者の集い」で農業高校3校のクラブ員９名と高校OBの農大生5名との交流会を行い、農高生が農大についての理解を深めた。 ・農業高校との連携を進めるために、プロジェクト活動に積極的に取り組んでいる倉吉農業高校と協議を重ね、令和3年度からは各コースで統一したテーマを持ってプロジェクト活動を展開してきた。果樹コースはジョイント栽培、作物コースはスマート農業、畜産コースは令和4年度に鹿児島で開催される全国和牛共進会に向けて、取り組みを強化していく。 ・スーパー農林水産業士認定要件である「食の6次産業化育成講座」を開催し、２４名(２校)が受講した。（レベル１：１９名（高校２校、社会人）レベル２：８名(２校、社会人））	A	倉吉農業高校等と行っている「高大連携一貫プロジェクト」について、連携を十分にとりながら確実に実施していく。２月21日（月）には本年度の実績と来年度の計画について校内で検討会を開催する予定。（特に畜産コースは全国和牛共進会に共同で参加するなど重点的に取り組む） 資料 2	
		3　ＩＪＵターン就農者の掘り起こし	3　東京、大阪で開催される移住フェア、新農業人フェアに参加し、就農を目指す一般社会人が事前に進路相談できる機会を提供し、相談に応じている。		3　参加可能な東京（3回）・大阪（4回）等で開催される就農相談会を通じて就農のための道筋や支援制度の紹介し、就農希望者の掘り起こしを行う。	3 ・鳥取IJUターンBIG相談会（1/15・16）にオンライン参加し、2件の相談を受けた。	A	オンライン相談会では市町村や農業農村担い手機構等の関係機関とそれぞれの来訪者の情報共有や連携を行い、本県就農への関心を高める。	
2	着実な就農	1　求人・求職者情報の就農支援関係機関との共有による就農の促進	1　近年、非農家出身学生が約５割を占める中、農業法人等からも求人が増えており、雇用就農による就農が増えている。 ＜年次別就農率＞ H28:70%、H29:67%、H30:59%、R1:７６%、R2:８０%（5か年平均７０%）	1 ・学生の就農率７０%	1 ・就農支援関係機関との情報（求人、求職、研修）共有 ・雇用就農相談会による農業法人等求人者および求職者のマッチング ・県内地元就農を目指す学生の就農地農業関係機関との意見交換会の開催	1 ・農業改良普及所、担い手機構等との情報共有を随時実施した。 ・雇用就農相談会を2回開催し(7月、11月)、求人者のべ４５事業者、求職者のべ１０９名が参加した。それにより2年生、研修生 ７名の就職が内定し、1年生は自身の就農イメージを具体化することができた。 ・また、昨年からの日野郡中山間営農ネットワーク協議会とのつながりで、5月29日（土）に日南町農家巡りツアーを実施した。農業大学校からは興味のある学生８人が参加し、現在日南町で研修生として頑張っている卒業生から説明を受けるなど交流を行った。最終的に１人の進路決定につながった。 ＜学生就農率３８%(１月末)＞ ・雇用就農後独立就農希望５名について、卒業後の就農がスムーズに進むよう関係機関との顔合わせ、意見交換等を行った。	D	新型コロナ感染症対策の関係で緊急事態宣言が出されるなど状況に応じて対処方針が変更される中にあっても、これまで構築してきたつながりを最大限に活用してマッチングを進め、学生の新規就農及び雇用就農支援につなげていく。	

課題番号	課題	評価項目	現状	評価指標	具体的方策	経過・達成実績	達成度	次年度の課題と改善策	外部評価委員からの提案・提言
		２　研修生に対する的確な進路指導の実施	２　社会人向け研修制度として運営している各種研修制度の趣旨はそれぞれ異なり、研修生の受講目的も様々である。就農実現に向けては、制度ごとに研修生のめざす目標を踏まえつつ、個々の背景やレベルに即した指導及びアドバイス、研修進捗状況をおさえながらタイムリーに関係機関との調整を実施していくことが極めて重要である。	２ ・研修生の就農率：100%	２　各研修において、研修開始時・終了時のみならず、研修期間中の個別面談等を複数回実施しながら、各研修生に適した進路・就農方針に関するアドバイス、必要な関係機関との調整を実施する。	２　就農に向け研修生と個別面談を重ね、支援方針を決定した。就農地の市町村役場、県農林局（普及所、農業振興課）と就農までのスケジュールや経営計画作成支援や共有を図り、連携して就農に向けた支援に取り組んだ。 ＜評価指標達成状況＞ ・アグリチャレンジ科の就農率82.6%。 ・先進農家実践研修就農率１００%（１人）、スキルアップ研修修了後就農率100%（3人）。	A		
３	教育環境の改善と学生支援体制の強化	１　学生に寄り添った相談体制の強化	１　農業大学校に入学してくる学生について、非農家出身や農業系の学校以外からの入学生が増加してきており、多様化が進んできている。それにともなった個々の学生に対するきめの細かい対応が必要である。	１ ・校内でのカウンセリングの回数：24回 延べ人数：70人	１　多様化している個々の学生に対して寄り添った対応を取るために次のことを実施する。 ・校内でのカウンセリング体制の充実 ・「全職員相談窓口体制」の構築 ・舎監との情報共有の強化 ・学生からの意見、要望をふまえた改善	１ ・校内でのカウンセリングの回数を3回／月（←2回）に増やすとともに新しいカウンセラーを配置した。来年度は4回／月に増やしてより体制を強化していく予定 ・農業大学校に勤務する職員全員が学生の相談窓口に対応できるように、職員研修を実施した。 ・不安を抱えている学生の状況や生活指導のために舎監との意見交換会を1月に1回程度の頻度で開催し、全コースの担当と舎監と情報共有を行っている。 ・学生及び実習助手からのアンケート調査を実施するとともにすべての学生から校長が面談を行い、集約した意見を学生教育等に反映している。	A	令和3年１０月１日に策定した「農業大学校改革プログラム」（別添資料）に沿って取り組むとともに定期的にPDCAサイクルをふまえて改善していく。	
		２　指導職員の資質向上	２　職員は農業改良普及員としての資格を有しているが、教育関係等の知識及び技能を十分に習得していないために、多様化する学生に対応するための教育関係の資質向上が求められる。	２ ・教育センター研修の受講回数：延べ受講回数5回	２　教育関係等の資質向上のために、次のことに積極的に取り組む。 ・学生指導のためのワークショップ開催 ・「エール」によるコンサルテーション実施 ・教育センター研修の受講	２ ・12月に実習助手を含む全職員を対象としたワークショップを開催し、指導職員としての意識向上を行った。 ・2か月に1回のペースで発達障害的な学生に対する対応方法について「エール」から現場で指導を受けるとともに、その後の対応についても意見交換を実施している。 ・県教育センターの主催する研修講座を積極的に受講し、学生指導や教育相談の対応力向上を目指した。 （5講座：12名受講）	A	令和３年１０月１日に策定した「農業大学校改革プログラム」（別添資料）に沿って取り組むとともに定期的にPDCAサイクルをふまえて改善していく。	・課題番号３－２（経過・達成実績）の表現について「発達障害的な学生」を「発達障害的特性を有する学生」に改めてはどうでしょうか。（藤田委員） 【対応方針】 ・訂正致します。

課題番号	課題	評価項目	現状	評価指標	具体的方策	経過・達成実績	達成度	次年度の課題と改善策	外部評価委員からの提案・提言
4	学生の総合的経営能力の向上	1　学生個々の状況に応じた個別指導の充実	【養成課程共通】 1　学生の就農意欲や体力、学力には幅があり、専攻実習での技術習得には個々の能力・スピードに応じたきめ細やかな指導が必要である。	1 ・理解度アンケートに応じた個別指導	1　各コース毎に「理解度アンケート」を実施し、農業技術や農作業安全に対する知識の習得状況について学生と職員の共通認識を図る。学生の苦手分野の克服、作業時間を含むコスト意識を醸成するための指標として活用する。 理解度アンケートの実施（7月、11月の２回）とそれを基にした個別指導（随時）	1 ・「理解度アンケート」により判定した知識・技能の理解度、習熟度を基に、面談、指導により、技能習熟度が向上した。また、昨年度から理解度アンケートの評価方法を４段階評価に統一している。・理解度アンケート実施(7月、12月ほか)（詳細は各コースごとに記載）	―	資料 3	
		2　計算能力を含めた基礎学力の向上	2　営農技術のなかには、圃場面積の計算、施肥量の決定や農薬の希釈など、計算能力が求められるが正確に計算できる学生が少ない。	2 ・１年生学力補完補講座（合格水準達成率：100%）	2　１年生の基礎学力（計算、単位など）を把握し、学力補完のための補講を行う。また、１・２年生とも専攻実習で、実践的に肥料・農薬計算を実施する。 ・１年生学力補完講座（20回） ・学力テスト（随時） ・専攻実習時の実戦力評価（随時）	2 ・29名中26名の学生に対し学力補完講座を23回実施した。 ＜合格水準達成率＞10%(4/19)→97% ・各コースの農場実習(肥料、農薬、種子等散布)により実践力を磨いている。	B		
		3　幅広い農業知識の習得と販売実習による経営感覚の向上	3　多様化する農業形態の中で営農するために、コースの枠を超えて幅広い知識と技術を身につける必要がある。またモノを作るだけでなく、「売る」ことも意識させることで経営感覚を持った農業者を育成する必要がある。	3 ・「校内技術競技」及び「流通販売実習」の効果的な開催	3　「校内技術競技」を行い、各コースから出題される問題（筆記・実物鑑定）を解きその点数を競う。また修農祭や校外で「流通販売実習」を実施し、商品ＰＲ方法などを学ぶ。対面販売を行うことで消費者ニーズを把握するとともに、接客方法を学び、生産販売に活かす。学生主体で企画、準備、運営を行うことで、就農後の店舗販売や自家農場のＰＲ手法を学ぶ。さらに、修農祭来場者にアンケートを実施し、次期開催等に活用する。	3 ・校内技術競技の開催(6/16、11/4) ・1、2年生が一緒に事前勉強するコースも見られ、学習意欲の向上につながっている。 ・流通販売実習として、校外の道の駅燕趙園、関金温泉まつりで対面販売を行った。校内では修農祭において、保護者やOBに限定して販売を行った。	A	新型コロナウィルス感染症発生状況を確認しながら流通販売実習を計画する。	
		4　地域で頑張っている卒業生等を訪問して自己の就農意欲を高める	4　非農家出身の学生割合が高くなってきていることから、地域で頑張っている農業者等を訪問し、就農・農業法人就職等に向けた意識付けが必要である。	4 ・各コースの現地視察回数（２回以上）	4　農家・卒業生等の訪問・視察（各コース2回以上）	4 農家・卒業生等の訪問・視察合計9回：果樹1、野菜2、花2、作物3、畜産1 ・学生が具体的な進路や就農のイメージを持つことができるようになった。 ・自分の目指す就農に必要な資格を知り、フォークリフト、小型車両系建設機械運転特別教育等の資格を取得した。（11名）	B		
		5　GAPに関する講義の継続及びＲ３認証の取得	5　近年、農業のグローバル化や食の安全意識が高まっており、生産工程を管理する手法（GAP）の教育が必要となっている。	5 ・GAP認証の継続取得（白ネギ）及び新規取得（花壇苗）	5 ・グローバルGAPに特化した講義について１年生を対象に年８回実施 ・各コースで改善取組を行う。 ・この学習の成果目標として、「白ネギ」での認証の継続取得及び「花壇苗」での新規認証取得を目標とする。	5 ・GAP普及推進機構から専門家を招き、グローバルGAPの理念から具体的なリスク評価、手順書の作成方法等に至るまで講義・演習・ワークショップを実施した。（６/２４～1/１７、8回） ・講義を通じ、リスクへの気づき、整理整頓や表示の大切さなどへの意識が高まった。 ・全コースで整理整頓や掲示（見える化）に取り組んだ。（詳細は各コースに掲載） ・学生を中心にグローバルＧＡＰの認証審査を受け、野菜コースは「白ネギ」で認証の継続取得、花きコースは「花壇苗」で新規に取得した（12月２４日付）。 ・果樹コースで「日本梨」での模擬審査を受け、認証に準ずる取組を継続した。	A	新型コロナウイルス感染症予防でリモート方式での講義を2回行ったが、講義方法の改善が必要。 来年度は作物コースでグローバルＧＡＰの新規認証取得を目指しおり、取得に向け準備を進めていく。 資料 4	
5	学生の専攻営農技術の向上	【果樹】 1　ほ場管理に係る主体性、責任感の醸成	1　永年作物である果樹の栽培技術を２年間の限られた期間で習得する事は困難である。よって、技術習得を図るためには、学生が主体的に責任感を持ってほ場管理を行わせる必要がある。	1 「1,2年共通」 理解度アンケートでほ場作物の管理等に関する項目について、職員評価で「できる」以上が80%以上 「２年次」 ・作業説明の評価として学習ﾁｪｯｸｼｰﾄの活用	1 「1,2年共通」 ・１人に１樹ｺﾞｰﾙﾄﾞ二十世紀の担当樹を割り当て、年間を通して栽培管理を行わせる。 ・梨等の栽培管理に関する基礎知識習得のためのゼミや小テストを月1回実施 「２年次」 ・各学生の担当樹種を決定する。各樹種の管理作業を行う際は目的、方法等を担当の学生が他の学生に説明する。 ・プロジェクト学習の課題設定、進行管理等を徹底させる。	1 ・月刊誌「因伯の果樹」のポイント解説の実施や農業技術検定の過去問の勉強会を１～2回/月程度行った。 本年度の農業技術検定では1年生2名が2級、1名が3級に合格した。 【理解度アンケート】 職員評価「できる」以上80%達成率 2年100%(5人中5人)　　1年　83%(6人中5人) ・2年生は①作業の説明準備→②説明→③チェックシートによる反省、指導の繰り返しによって、コミュニケーション能力、知識の向上を図ることが出来た。この活動はプロジェクトをまとめていく際の作業進行にも役立ったように感じている。	A	圃場の状態について、より深く観察をさせるため、各樹種の代表品種について、生育ステージの記録と月１回の各圃場の定点調査を実施させる。 資料 5	

課題番号	課題	評価項目	現状	評価指標	具体的方策	経過・達成実績	達成度	次年度の課題と改善策	外部評価委員からの提案・提言
		２　新技術、新品種に係る技術習得	２　本校では、新技術、新品種を積極的に導入し、生産体制が整いつつある。これらを活用して生産現場の現状や将来的ニーズに応じた知識・技術の習得を図る	２ 学習した新技術について理解度を確認するテストを行い全員が７０点以上	２ ・新品種研修会、ｼﾞｮｲﾝﾄ仕立て研修会、現地視察等の参加（3回程度／年）。 ・参加した研修会で学んだ技術を本校の新品種、ジョイント栽培樹等で実際に行い、知識、技術の深化を図る。	２ ・ジョイント栽培技術や新技術の学習のため、現地ジョイント栽培園の視察1回と二十世紀梨記念館の見学を実施した。また、校内のジョイント栽培の管理を通じ、ジョイント栽培の特徴について理解を深めた。 ・職員も普及員の技術向上研修の視察に参加し、現場におけるジョイント栽培の課題について学び、学生指導に生かすことが出来た。 ・２月１、2日には、農研機構が主催する寒冷地果樹研究会、落葉果樹研究会をオンラインで聴講し、最新の果樹の技術について学習した。 ・ジョイント栽培に関する確認テスト 平均85点　　70点以上100％	A	圃場の関係上、本校のジョイント園は、推奨されている植栽よりも樹列が広いので、現地視察の回数を２回以上として、マニュアルに沿った植栽の園における栽培状況を学習させる。	
		３ GLOBALG.A.P.の取り組み	３　国際化している農産物市場に対応できる能力を身に付けることが必要となっている。農産物の生産工程管理に係るＧＡＰの基本理念や考え方等の習得をとおして、国際情勢に対応し得る学生の育成を図る必要がある。	３ ・リスク改善による適合基準達成割合 ：100％ （模擬審査合格） ・台湾へのナシの輸出	３ ・生産工程におけるリスク点検、評価及び改善策について前年の取り組みの改善を図るとともに、新たに追加する事項の有無について学生を主体にしながら検討する。 ・学生に主体性を持って関わらせるため、GAP責任者を設けて活動を行う。 ・Ｒ２から取り組んでいるパソコンによる記録をさらに進める。 ・全ての日本梨ほ場及び関連施設で活動実施	３ ・書類の読み合わせや改善活動を通じて、GAPの内容の理解とともに農業技術について知識を深めることにもつながった。また、GAP審査で使用する資料についてはすべてデジタルデータで保管し、次年度以降の取り組みがスムーズにできるようになった。 ・12月9日にGAP推進機構の今瀧氏（本校のGAPのコンサル）による模擬審査を受け、適合基準を満たしていることを確認した。 ・９月１０～12日に台湾の高級百貨店(裕毛屋）で本校のニホンナシ「新甘泉」100ｋｇを販売した。学生は、輸出に向けた事前学習や輸出用の選果、オンラインによる現地の店員との意見交換を通じて、国際感覚を養うことが出来た。	A	年間計画を立て、ニホンナシだけであった取り組みを、圃場全体に拡大する。	

課題番号	課題	評価項目	現状	評価指標	具体的方策	経過・達成実績	達成度	次年度の課題と改善策	外部評価委員からの提案・提言
		【野菜】 1　栽培基礎技術の向上とプロジェクト学習による実践力の養成	1　コースの学生13名のうち、農業高校以外の出身者が4名(32%)、また、非農家の学生が12名(92%)を占めており、農業に関する基礎知識及び技術の習得支援が必要である。 将来的な独立就農の意向を現段階で 8名(67%)の学生が示しており、実習のレベルを個別の就農目的に合わせて充実させることが重要である。	1 ・理解度アンケートで、野菜に関する栽培基礎技術に関する項目について「できている」以上の評点が８０%以上とする。 ・農業技術検定 1年次：3級100% 2年次：2級　50%	1 「1年次」 ・春夏作は鳥取県の主要品目である白ネギ、トンネルスイカは1年生全員で管理を行う。 ・秋冬作は各自の希望により一人１品目の栽培管理を行い、2年次のプロジェクトに向けて栽培の練習と調査方法を身に付ける。 ・1学期中に主要野菜品目の基礎知識を習得させるため野菜ゼミ及び小テストを行い早期理解を促す。 ・経営の手引きを参考に1品目について経営試算を作成する。 「2年次」 ・各自の進路事情合わせたプロジェクト課題に対応した品目を担当させる。 ・プロジェクト課題はほ場の準備から収穫終了までの長期的な管理計画を立て、ほ場準備から収穫までの栽培管理及びとりまとめを行う。 ・1年生に適切な指示ができるように、2年生は1年生のハウス管理の補佐を行う。	1 「1年次」 ・春夏作は白ネギ、トンネルスイカ、メロンを1年生全員で管理した。 ・春夏作の一部と秋冬作は各自の希望により1人1品目以上について品種や栽培方法を変えて栽培管理と調査を行い、プチプロジェクトとして結果をまとめ、野菜コースの中で発表を行った。 ・経営試算は実施できなかったが、次年度のプロジェクトに向け、それぞれの課題で経営試算を行う予定である。 【理解度アンケート】８０% 「2年次」 ・プロジェクト課題について、計画に基づいてほ場準備から収穫終了まで栽培管理し、結果をまとめて発表することができた。本コース2名が本校代表として中四プロジェクト発表会に参加した。 ・1年生に対して指示や助言ができるようになった。 【理解度アンケート】８１% ・農業技術検定合格率 【1年：3級　８６%（6名）　2年：2級：３３%（2名）】	B	普通高校出身者の学生がいるため、入学当初から基本的な農業に関する勉強や基本的な農作業を1年生の夏までに身に付けるようにする。機械操作に不安を感じる学生が多いことから、研修科と連携して定期的に機械操作の研修を行う。 資料 6	
		2　県内先進農家、先進地及び試験場視察	2　野菜コースでは、現地の新技術（管理、品種等）を積極的に導入している、また、産地課題の解決プロジェクトに取り組む学生もいるため、現地の栽培管理状況を理解する必要がある。 さらに、現地ではスマート農業の導入が進むことが考えられ、新技術と併せてスマート農業先進農家の状況も理解する必要がある。	2 理解度アンケートで、鳥取県主要品目の現地状況について「理解できる」以上の評点が80%以上。	2 ・鳥取県主要品目を中心に先進地視察を実施する。 想定する品目(白ネギ、ブロッコリー、スイカ、トマト、ミニトマト、ホウレンソウ、イチゴ)	2 ・野菜栽培の先進地視察として、大原トマト、倉吉スイカ、スイカ選果場を視察した。 ・コロナの影響のため、視察の機会は限られたが、農業大学校とは異なる栽培管理方法や栽培に取り組み姿勢等農家から直接話を聞いて刺激を受けたようであった。	B	コロナの影響で先進地視察の機会が少なかったが積極的に視察できるようにする。2年生は就職活動と合わせて視察できるようにする。	
		3　GAPの取組	3　国際化している農産物市場に対応できる能力を身に付けることが必要となっている。農産物の生産工程管理に係るＧＡＰの基本理念や考え方等の習得をとおして、国際情勢に対応し得る学生の育成を図る必要がある。 令和2年度に白ネギでグローバルＧＡＰの認証を取得した。	3 ・リスク改善による適合基準達成割合 ：100%（認証取得） ・理解度アンケートでGAPに関する項目について「理解できる」以上の評点が80%以上	3 ・生産工程におけるリスク点検、評価及び改善策の検討について、学生主体の取組とするため、学生内でグループを作り、役割分担をしながら改善活動を実施する。 ・秋冬ネギ圃場及び関連施設でグローバルＧＡＰの継続認証に向けた活動を行う。	3 ・毎週金曜日の午後にGAPの時間を設け、手順書に従ってほ場、専攻教室等付属施設の整理整頓、危険個所の点検と改善を継続的に実施し、GAPに対する理解と農場改善の習慣化を図った。 ・12月に秋冬ネギでグローバルGAPの継続認証を取得した。	A	GAPの取り組みを継続する。認証取得はせず、内部審査とする。 資料 4	

課題番号	課題	評価項目	現状	評価指標	具体的方策	経過・達成実績	達成度	次年度の課題と改善策	外部評価委員からの提案・提言
		【花き】 1　栽培基礎技術の向上と需要期を意識した栽培管理の習得	1（1）　近年、非農業高校出身者が多いため、農業の基礎知識等を習得させることが重要となっている。その上で、花き栽培基礎技術の習得を目指し、さらには、新技術や本県に適する新品目について、積極的に学び、検討することにより、栽培技術の向上を図る必要がある。	1（1） ・理解度アンケートで花きの栽培基礎技術に関する項目で「できている」以上の評価が80%以上。	1①農業一般の基礎知識等支援 ・農業一般の基礎知識等を習得させるために、ゼミ等の拡充を図る。 ・農業技術検定等の活用 ②花き栽培技術等支援 生産面では、学生に担当品目を持たせ、栽培管理を行い、基礎技術の習得、責任感の醸成を図る。また、花き生産では需要期（お盆、彼岸、年末等）に出荷することが重要なため、開花調節技術等を取り入れ、常に出荷時期を意識した栽培管理を行う。 販売面では、消費者に手にとってもらえる出荷物・商品作成を目指し、花束、寄せ植え作成などの体験から、色の合わせ方、使用方法、商品PR方法等について学習し、販売方法の改善・提案へと結びつける。 ・長期栽培スケジュール等の作成による作業の確認と作業日誌の記載の徹底 ・プロジェクト活動の進行管理 ・とっとり花回廊での研修 ・他生産者の販売工夫観察・コース内周知（直売所）　等	1①農業一般の基礎知識等支援 ゼミを行い農業一般の知識習得に務めた。毎回最後に小テストを行って学生の理解度を把握し、次回のゼミ内容に活かした。学生の学習意欲、知識とも徐々に高まっている（農業技術検定：1年生4名全員3級取得）。 ②花き栽培技術等支援 ア　生産面 ・担当品目を決めて、自ら作業を提案させることで基礎技術の習得、責任感が醸成された。 ・日々の作業記帳により、学生の知識定着に繋がった。 ・中長期の栽培スケジュールを学生自らが作成し、ストックやシンテッポウユリで開花調節技術をとり入れた結果、需要期に販売できた。学生は需要期を意識した栽培管理ができ、重要性も理解できた。 イ　販売面 ・日々の出荷、販売実習等でPOP、花束の配色、陳列方法を工夫して、購買意欲を高める商品づくりを意識付けた。 【理解度アンケート】８９%	A	学生の理解度に応じた指導体制の継続 資料 7	
			（2）鳥取県では、花き振興などのために、毎年「花のまつり（鳥取県花き振興協議会主催）」が開催されており、その中の花き品評会などで県内の生産者が技術研鑽を図っている。	（2） ・理解度アンケートで花のまつりに関する項目で、意識の向上が「できている」以上の評価が80%以上。	（2）花き品評会 ・「花のまつり」の中で開催される鳥取県花き品評会に出品を行い、県内花き生産者の高い技術に接することで、意識向上を図る。 ・花き品評会への出品参加　　学生1人当たり1点以上 ・現地視察研修　2回　等	（2）花き品評会 ・コロナ禍の影響で今年度の「鳥取県花き品評会」は中止。出品出来なかったが、全員が花束を作成してお互いに感想を述べ合ったり、人気投票を行った。生産者との比較は出来なかったが、栽培や出荷技術の向上に繋がった。 ・現地視察を2回実施した（9月14日、10月15日）。その結果、栽培技術向上の意識が高まった。 【理解度アンケート】―%（中止のため）	―		
		2　「花育」を通じた知識・プレゼン能力等の向上	2　花きコースでは、学生の花への理解度を深めることと、幼児等に花を触れる機会の提供を目的に「花育」活動を実施している。	2 ・理解度アンケートで「花育」に関する項目で「できている」以上の評価が80%以上。	2　「花育」活動を行い、学生自身の花に対する知識等を深め、さらに活動を通じて、表現力等の向上に結びつける。 ・「花育」活動　1回　等	2 ・「花育」活動を1回開催（11月15日）した（2回目はコロナの影響で中止）。 ・学生自ら企画して花の知識習得に努め、当日の運営も学生に行わせた。その結果、花の理解度、表現力が高まった。また、受講者（園児）の反応から、花の魅力を再認識した。 【理解度アンケート】９１%	A	プレゼン能力向上のため、事前に説明資料等を準備させる。 資料 8	
		3　GAPの取り組み	3　国際化している農産物市場に対応できる能力を身に付けることが必要となっている。農産物の生産工程管理に係るＧＡＰの基本理念や考え方等の習得をとおして、国際情勢に対応し得る学生の育成を図る必要がある。	3 ・リスク改善による適合基準達成割合：100%（花壇苗で認証取得）	3 ・生産工程におけるリスク点検、評価及び改善策の検討について、学生主体の取組とするため、各責任者を設け、責任者を中心に改善活動を実施する。	3 ・各施設の責任者を決めて、毎週金曜に認証取得の準備を進めた。その結果、学生自ら提案してほ場・施設の片付けや、危険個所の改善が行えるようになった。 ・また、様式を作成して、植物の観察や出荷記録簿を記入させた結果、少しずつではあるが観察による気付きや提案が行えるようになった。 ・さらに、チームを決めて審査に向けた発表練習を行うことで、責任感や連帯感の醸成に繋がった。 ・12月に花壇苗（パンジー・ビオラ）でグローバルGAPの継続認証を取得した。 【理解度アンケート】８５%	A	・グローバルGAPの認証継続のため、必要書類の記録や整理整頓を意識付ける。 ・また、新規に申請を行う作物コースと連携して研修会等を開催する。 資料 4	

課題番号	課題	評価項目	現状	評価指標	具体的方策	経過・達成実績	達成度	次年度の課題と改善策	外部評価委員からの提案・提言
		【作物】 1　作物栽培（水稲、大豆,小豆）基礎技術の向上と農業機械操作技術の習得	1　約半数が非農家出身であるため、水稲の基礎栽培技術を圃場管理を通じて習得する。 水田作ではトラクター、田植機、コンバイン等の機械操作が必要であるが、操作未経験の学生がほとんどである。	1・理解度アンケートで水稲の栽培に関する評価項目で「できる」以上の評価が80%以上。 ・理解度アンケートでトラクター、田植機、コンバインの操作に関する各評価項目で「できる」以上の評価が80%以上。 ・耕耘技術競技の実施　50分/10a以内が50%以上	1　各学生には圃場１筆を責任をもって管理させ水稲、大豆栽培等の技術の習得を図る。 　水稲栽培では2年生のプロジェクト学習等により、星空舞等の新品種やスマート農業、低コスト栽培技術など現地で必要とされている新技術の習得を図る。大豆栽培では、転作の基幹作物として基礎技術を習得していく。 　スマート農業等新技術に関しては、ゼミや先進農家視察、農高連携等通じて技術知識習得していく。 　学生の機械操作技術の習得を図るためには、実習量を多くする必要がある。そのため、農大の管理ほ場面積を維持しつつ、近隣農家から機械作業実習ほ場の提供を受け、水田での作業面積を確保する。また、トラクターでの耕耘技術競技を実施し、技能向上を図る。	1 ・各学生は担当圃場を責任をもって管理することができた。プロジェクト学習を通して課題解決の手法を学ぶことができた。 ・新規にソバ、小麦の作付けを行い、技術の習得が図られた。 ・水稲のスマート農業について、本校でドローンを利用した散布方法や直進アシストトラクターの実演を行い、知見や技術の習得を図った。また、ドローンの播種方法も先進農家の見学で習得した。 【水稲栽培理解度アンケート】　１００％ ・農大の圃場、近隣農家の圃場で水田機械の作業技術の研鑽を図り、ほぼ習得できた。 【機械操作理解度アンケート】８０％ ・トラクタ耕耘技術競技については2月下旬～3月にかけて実施予定。	A B	・スマート農業については、プロジェクト活動や圃場管理システムの導入を通して技術習得を図る。また、技術導入してる先進農家や農業高校の見学、研修会等を通じても研鑽を行う。 ・作業実習おいて、作業の意味と圃場の状況にを応じた作業方法等を自ら考え実践する力をつける。 資料 9	・課題番号５〔作物〕評価項目１について達成度が二つあるのであれば評価項目を二つ設けるべきではないでしょうか。（藤田委員） 【対応方針】 ・評価項目を二つに致します。
		2　有機栽培技術の習得	2　有機栽培に漠然とした興味を持って入学する学生が多いが、具体的な栽培管理は未経験である。	2 ・理解度アンケートでの有機栽培技術に関する項目で「できる」以上の評価が80%以上。	2　有機栽培技、特別栽培導入のほ場を設置し、プロジェクト課題を通じて栽培技術の習得及びメリット、デメリットの理解を図る。また、現地栽培農家へ視察し技術の習得を図る。	2 ・有機栽培圃場を設置し、栽培技術の習得を図った。プロジェクト学習でも取り組み、メリットデメリットを把握することができた。 ・有機栽培農家、農業試験場への視察研修を行い、栽培技術、知識の習得が図られた。 【有機栽培理解度アンケート】１００％	A	有機特別栽培に意欲がある学生がいるため、継続して雑草対策を中心にプロジェクト活動等で対応予定。	
		3　白ネギ、ブロッコリー等の栽培技術習得	3　農業法人へ就農する学生も多く、水田農業の複合経営で一般的に取り入れられている白ネギやブロッコリー等露地野菜の栽培技術の習得も必要。	3 ・理解度アンケートでの白ネギ、ブロッコリーの栽培に関する評価項目で「できる」以上の評価が80%以上。	3　白ネギ、ブロッコリー等露地野菜を栽培し、技術の習得を図る。また、栽培している複合経営農家の視察を研鑽を深めていく。	3 白ネギ、ブロッコリー等については、１年生を中心に栽培するため、栽培前に研修会を実施し要点の把握を行った。また、一連の作業を経験して生育に合わせた適切な管理技術を習得した。スイートコーン、かぼちゃ等の新規露地野菜に取り組み技術習得を図った。先進農家の視察については、コロナ禍で対応できず。 【栽培理解度アンケート】８８％	A	きめ細かい観察の重要性と適期作業について、知識等を深めていく。	
		4 GAPの取り組み	4　国際化している農産物市場に対応できる能力を身に付けることが必要となっている。農産物の生産工程管理に係るＧＡＰの基本理念や考え方等の習得を通して、国際情勢に対応し得る学生の育成を図る必要がある。	4 ・リスク点検及び改善箇所（危険個所、置き場表示の改善等）　1か所以上	4　講義で学んだGAPに関する手法を実習の中に取り入れ、リスク点検及び改善活動について、学生への意識定着を図る。	4 リスクの洗い出し等を行い共通認識を図った。調整作業では、リスク改善と効率性を考慮した配置等を検討し実施した。 物品の置き場所を整理し、表示を徹底した。 各作業等についての手順書を作成中。	A	グローバルＧＡＰを水稲で取得する予定であり、認証に向けて研鑽、実践を進めていく。	

課題番号	課題	評価項目	現状	評価指標	具体的方策	経過・達成実績	達成度	次年度の課題と改善策	外部評価委員からの提案・提言
		【畜産】 1　家畜（牛）の飼養管理、繁殖生理に関する基本的知識及び技術の習得	1　畜産コースにおいて、学生９名のうち、農業高校以外の出身者が7名（７８％）、また非農家出身学生が９名（１００％）と、まずは牛に慣れ、基礎的な知識・技能を重点的に習得させることに力を入れる。	1 ・理解度アンケートにより、牛の発情行動、健康状態のチェックができる以上の評価 80%以上を目指す。	1 牛の行動や採食量等をしっかり観察させ、健康と異常をチェックできる目を養う。また、発情の発見率の向上など、生産性を上げながら健康に管理する方法を習得する。 基礎知識を習得する目的で「畜産ゼミ」の充実を図る。また、繁殖生理を理解する目的で、子宮の解剖や超音波画像診断器による卵巣チェック等を行う。	1 ・専攻実習時に現場で実際の牛を使って観察のポイントを示し、発情兆候や健康状態（便、食欲、歩様、乳量など）のチェック、報告、記録を学生が主体的に行うことにより、観察の精度が向上した。 【理解度アンケート】70% ・専攻講義を中心として牛の生理、栄養、繁殖の基礎を、本校の飼養管理内容を教材として、具体的、実践的に習得し、理論と実践の融合的理解が向上した。 【理解度アンケート】60%	C	学生自身の力量で牛を飼養することには至っていないため、より現場で実践的に対応する飼養管理技術を習得する。	
		2　家畜管理用機械等の操作技術の習得	2　畜産関連業種又は農業法人が本学畜産コース学生に求める人材とは、家畜の基本的管理技術及び畜産管理用機械、飼料用作物関係機械の操作技術を習得した人材である。	2 ・理解度アンケートにより、コンプリートミキサー、ホイルローダー、搾乳機械の操作が日常的にできる。ロールラッピングマシーン等の操作が１人でできることの評価。 ・大特・けん引以外の免許（小型車両系建設機械、フォークリフト等）について、将来的に必要となる者の取得割合100%	2 ・飼料の調製と給与、糞や敷料の搬出･運搬、堆肥乾燥機の操作、搾乳作業など日々の飼養管理により機械操作の習熟を図る。 　また、飼料用作物関係機械（堆肥及び肥料散布～収穫、調製作業）については体験実習を実施する。 ・就農・就職先での作業に対応できるよう、必要な免許を取得することを奨励する。 ・1年時から「小型車両系建設機械運転業務特別教育」を受講させる。	2 ・飼料作物（春イタリアンラグラス、秋飼料用トウモロコシ）の収穫や調製作業、日常の牛舎管理（糞尿処理、飼料調製、搾乳）で農業用機械（トラクター、ホイルローダーなど）の安全で基本的な操作を繰り返し実践した。【理解度アンケート】80% ・小型車両系建設機械運転業務特別教育修了者は通算で1年生が4名、2年生が4名である。当該教育の実技は、有資格者である本コースの職員が担当し、基本操作を徹底的に習得した。【達成度】88% ・その他の学生の資格取得はフォークリフト運転技能講習2名、家畜商3名であった。	B	小型車両系建設機械運転業務特別教育の全学生修了を図り、農業機械の操作、メンテナンスの基礎の習得に努める。 資料　10	
		3　牛の繋養、誘導技術の習得	3　乳牛及び和牛共進会に積極的に参加を行い、牛の誘導技術の習得を行っている。 【第12回全国和牛能力共進会】 令和４年10月に鹿児島県で開催される本大会に倉吉農業高校と連携して出品することが決定している。既に12頭が受胎し、3月から順次出産をしてる。倉農と連携しながら勉強会や調教等を行い上位入賞を目指す。（R3年度入学生が2年生になり大会に出場する）。	3　各共進会への出品 （6月：中部酪農祭） （7月：中部畜産共進会） 　9月：県畜産共進会	3　共進会に参加をすることで飼養管理技術の習熟と育種改良の面の充実を図る。 【第12回全国和牛能力共進会】 倉吉農業高校と連携を強化 ・両校学生で全共対策チームを組織 ・和牛や全共の歴史についての勉強会を開催 ・協力して定期的に調教練習を行う。 ・全共出場の常連農家の視察 ・調教マニュアルの作成 ・県畜産共進会をプレイベントと位置付け出場を目指す。	3 ・牛の共進会は、新型コロナウイルス感染防止の影響で中止等のため出品していない。 ・全国和牛能力共進会（全共）出品候補雌牛として4頭（うち1頭は倉吉農高生産牛）を保留、飼養中である。 ・12月に行われた全共出品区集合審査会に1年生が参加し、農家の牛の審査の様子を学んだ。また、同月、伯耆町内の全共に詳しい繁殖和牛農家に出向き、全共に向けての牛の調教等を、実際に牛を使った講習を受け、それを基に、本校の全共候補牛の調教に取り組みを開始した。【理解度アンケート】70%	C	倉吉農高と連携し、繁殖和牛農家の支援を取り付け、全共候補牛の調教を継続し、出品牛を選定し、10月の全共（鹿児島大会）に参加する。	
		4　GAPの取り組み	4　国際化している農産物市場に対応できる能力を身に付けることが必要となっている。生産物の生産工程管理に係るＧＡＰの基本理念や考え方等の習得を通して、国際情勢に対応し得る学生の育成を図る必要がある。	4　牛舎内や牛舎周辺の環境整備を定期的に行う。また各種作業マニュアルの作成を行う。	4 ・牛舎内や牛舎周辺の環境整備 　（定期的に草刈り、ごみ捨て等を行う） ・各種作業マニュアルの作成 　（搾乳機器、各種畜産機械操作マニュアル等）	4 ・不用品やごみの定期的廃棄や草刈りは学生が主体的に取り組み、牛舎環境の清浄化が見られた。 ・搾乳機器の操作を含む、搾乳手順の基本をテキストを利用して習得し、乳生産の衛生状態が向上した。また、夜間見回りの学生が機器のエラー表示を見つけ、早期に対応を行うことができるようになった。 【達成度】90%	B	衛生害虫等が牛舎で見られることがあるため、一層の清浄化を進める。また、白バラ認証制度（より安全・安心・美味しい牛乳を生産することを目的とした制度）への参加を検討し、衛生環境や作業環境の改善の学習を推進する。	

課題番号	課題	評価項目	現状	評価指標	具体的方策	経過・達成実績	達成度	次年度の課題と改善策	外部評価委員からの提案・提言
6	学生の農業機械操作技術の向上	1　大型特殊免許とけん引免許の取得	1　就農や農業法人へ就職を目指す学生にとっては、トラクター、コンバイン等の大型農業機械の運転操作を行う上で大型特殊免許の取得が必要。また水稲・畜産関係へ就農や農業法人へ就職を希望する学生は、けん引免許の取得も必要となっている。	1 ・1年生の大型特殊免許の合格率(100%) ・1年生のけん引免許の合格率(90%)	1　試験日までの練習期間が限られているため、練習日を計画的に設定する。（練習は、効率よく交代を行い1人当たりの練習回数を十分確保する） ①大型特殊免許 6人/日、練習回数4回～5回/人 乗車回数12回～15回/人 ②けん引免許 5人/日、練習回数7～8回/人 乗車回数21～24回/人	1 ・1年生の大型特殊免許の合格率　100% 26名中26名合格 （昨年学科試験不合格の2年1名も本年度合格） ・1年生のけん引免許の合格率　100% 24名中24名合格（希望者） （昨年未受験の2年生1名も本年度合格）	A		
		2　農業機械の操作技術の向上	2　卒業後に就農又は農業法人へ就職する学生は、刈払機やロータリー耕耘の運転操作は必須であるが、操作の苦手な学生も見受けられるため、当該学生のレベルアップが必要。	2 ・確認試験の合格点達成率　草刈り(80%)、耕耘(80%)	2　農業機械の取り扱いに不慣れな学生に農業現場で使用頻度の高い、刈払機及びロータリー耕耘について補完的に追加実習を行う。（指導対象学生は各コース担任と相談の上決定） ○刈払機（10名程度） ・重点指導期間(7月～11月)、実習(草刈り)5回/人 確認試験(実技)、習熟度アンケート ○ロータリー（8名程度） ・重点指導期間(7月～11月)、実習(耕耘)5回/人 確認試験(実技)、習熟度アンケート	2 ・刈払機については、各コース指導教員による見極め、指導により操作技術を習得させた（100%）。 ・ロータリ（トラクタ、管理機）耕耘についても、同様に各コース指導教員による指導により操作技術を習得させた（100%）。	A		
		3　農業機械の点検整備技術の向上	3　使用する機械の操作技術の習得のみならず、その点検整備についても基本知識の習得と技術の向上が必要である。	3 ・確認試験の合格点達成率　知識(100%)、実技(100%)	3　使用機械の構造と点検整備の手法について学ばせる。 ○取扱説明書の重要性・点検整備の重要性を認識させる。 ○機械の取扱説明書の熟読、頻繁な目通しによる知識の向上を図る。 ○機械の点検整備（日常点検・定期点検）の反復による技術の向上を図る。（実技・確認）	3 ・取扱説明書の重要性・点検整備の需要性については、全員が理解した（レポート提出により確認）。 ・点検整備の実技についても、各コースで選定した主要機械について、取説を見ながらではあるが、全員が実施できることを確認した（実技確認、一部レポート）。	A		
		4　農作業安全意識の向上	4　農作業事故を未然に防ぐためには危険個所、危険行為を事前に予測、把握することが重要であるが、学生にはその意識・知識が乏しい。	4 ・農作業安全関連授業の実施（2回）	4　農作業安全の授業を設定する。また学生の事故防止の参考につながる啓発資料を作成する。 ○農作業安全関連授業の実施（2回/6回） ○校内危険箇所、行為を把握し、農作業事故の減少に繋げる。	4 ・農作業安全講習を2回実施 ・校内危険箇所、行為について各コースでグループワークし、リスクを共通認識できた。また、安全作業のための各コースで使用する機械についての点検整備の重要性を理解させた。校内での機械作業の事故はなかったものの、ハサミなどの器具による負傷が2件あった。	B	農業機械に限らず、農作業事故防止への意識を機会あるごとに啓発する。	・課題番号6の達成度は評価指標に鑑み、Aでも良いのではないでしょうか。（藤田委員） 【対応方針】 ・訂正致します。
7	社会情勢に即応した実践教育の実施	1　実用性の高いプロジェクト活動の確保	1　農業現場での実用技術の習得並びに課題解決手法を習得する目的でプロジェクト活動（卒論）を実施している。 例年、プロジェクト成果数課題を農村青年冬のつどいや直播栽培研究会等で発表している。		1　課題解決手法の習得を意識するとともに、生産現場のニーズに応えられ、学生が就農後に活用できるプロジェクトの完成を支援する。	1 ・プロジェクト研究の指導を行い、21名全員が研究内容を取りまとめ、発表した。 例年、校外においても研修会等で発表を行っているが、新型コロナウイルス感染症の影響により研修会の中止や、参集範囲の縮小により校外での発表には至らなかった。 ・本校の代表として2名の学生が中国四国ブロック農業大学校等プロジェクト発表会に参加した。		資料 11	
		2　資格・免許取得	2　卒業後の就農（自営、雇用等）に即応するため、大型特殊・けん引免許の他、様々な資格・免許取得を推奨し、取得支援を行っている。	2 ・大型特殊・けん引免許（農耕車限定）以外の資格・免許取得者割合50% ・日本農業技術検定合格者割合60%	2　資格・免許取得者数、取得資格・免許数を確保するため、資格試験情報をきめ細かく学生に周知する。	2 大特免許・牽引免許（農耕車限定）以外の資格・免許取得のための支援を実施し、以下の資格を取得した。 ・フォークリフト：7名 ・小型車両系建設機械：3名 ・車両系建設機械：0名（調査中） ・家畜人工授精師：4名（見込み） ・玉掛け：3名 （取得者割合：35．4%（17名/48名） ・日本農業技術検定合格：2級5名、3級12名 （合格者割合61%（合格者17名/受験者28名））	C A		

課題番号	課題	評価項目	現状	評価指標	具体的方策	経過・達成実績	達成度	次年度の課題と改善策	外部評価委員からの提案・提言
		３　地域社会活動への参加	３　１、２年生ともに履修内容に地域貢献活動（ボランティア）を盛り込み、地域社会の一員としての自覚の醸成を図っている。また、近年、雇用就農が増加しているが、コミュニケーションが苦手な学生もおり、コミュニケーション能力の向上が必要。	３ ・地域ボランティアへの参加（2回）	３　地域貢献に対する意識啓発とボランティア活動への積極的参加を促す。また、コミュニケーション能力向上に向けた講座を設ける。	３ ・学生の地域貢献活動を「農村社会と文化」「農村社会とコミュニケーション」の講座の単位の一部として評価。 ・新型コロナウイルス感染症の影響により、イベントが少ない中、学校から積極的にボランティアの紹介を行った。 ・全員が2回以上のボランティア活動(代替え措置のレポート含む)を実施見込。 ・ボランティア活動を通じて、地域の人との交流や人の役に立つことの喜びを感じる等の意見があった。	A	学校からの紹介を待つのではなく、学生が自ら地域へ出て活動を探す姿勢が必要。	
８	多様な研修制度の運用と研修生のニーズに即した就農支援の実施	１　関係機関との連携による進路調整	１　アグリチャレンジ科は、農業に関する基礎訓練として定着しつつあり、各機関の就農相談においても、農業未経験者に第一に促す研修として浸透してきた。今後は、雇用拡大により経営発展を目指す経営体の育成とあわせた制度運用をさらに意識し、引き続き市町村、普及所、ＪＡ、担い手育成機構等関係機関との意識統一と情報共有を図り、研修生の進路調整を進めていくことが必要。	１ ・就農率の向上	１　雇用就農意向の研修生の就職に向けて、研修調整員による研修生情報および雇用可能な経営力を有する経営体情報について関係機関と共有することに一層努める。	１ ・アグリチャレンジ科修了生２３名のうち、82.6%が就農した。 　雇用就農１２名、自営就農１名、親元就農３名、研修後就農予定３名。	A	研修生の進路意向を関係機関と情報共有し、求人情報の少ない地区での雇用先を連携して探すことで。雇用就農率の向上を目指す。 資料　12	
		２　研修の周知	２　スキルアップ研修を幅広く周知し、受講者の確保が必要。	２ ・研修生の確保	２　各種機会を活用し関係機関への再周知を図り、就農相談時に適切に提示していただけるようにする。また、JA・市町村の協力を仰ぎ、募集時期をとらえた各広報誌への記事掲載を行っていく。	２ ・県・市町村の広報誌や新聞へのお知らせ掲載、市町村、ＪＡ等関係機関と連携した就農相談者への研修紹介を実施した。 ・長期研修受講者 　ミニトマト1名（～10月）、スイカ2名（10月～）、果樹2名（4月～1名、10月～1名） ・短期研修受講者 　白ねぎ３名（4月～8月1名、9月～1月2名）	A	継続した就農相談者への紹介や県、市町村、ＪＡ等の広報誌や新聞へのお知らせ掲載を活用し、研修生募集について広く情報発信していく。	
		３　新規就農の優良事例発信	３　本校研修を経て独立自営就農した方、アグリチャレンジ科受講をきっかけに雇用就農に至った方等、近年で様々かつ優良な就農事案が生まれている。今後就農を検討する方に対し、これら事例の情報提供は有効であるが、従前積極的に行えていなかったのが実状。	３ ・HPを活用した研修修了生就農事例の追加	３　HPでの情報発信を行う（印刷物として事例集を作成よりも発信が早い。就農相談対応時に必要な事例を提示することも可能。）。	３ ・追加掲載に向け、修了生1名について記載内容等を確認中。	―	就農事例の記事作成を継続し、掲載数増に取り組む。	
		４（GAP関連）研修拠点施設の適正管理	４　農業学習館は、スキルアップ研修野菜専攻の拠点施設であり、栽培管理に係る資材・小農具・出荷資材・各種工具などを保管するとともに、毎日出荷調製作業を行う場所として活用している。日々の整理整頓の徹底について、自営開始を志す研修生に意識付けしていくことが重要。	４ ・出荷調整作業におけるリスク点検及び改善箇所の検討	４　農業学習館内の点検を研修生とともに行い、出荷調整作業におけるリスク点検及び作業性を考慮した物品の配置等の改善活動を実施し、研修生への意識定着を図る。	４ ・出荷調製時の異物混入等のリスクを研修生と再点検し、道具類の整理整頓を心掛けた。 ・また、白ねぎ皮むき機の作業時の負荷を減らすための作業台の見直しや効率性を考慮した配置等を就農時に実践できるように研修生と検討し、改善に取り組んだ。 ・研修生とともにこれまでGAPに取り組んだ野菜科、花き科、果樹科での実施状況を見学し、学習館内のリスク点検により農薬保管、資材、農産物調製等の場所の分離を実践した。	A		